

チャレンジ レポート

このコーナーは、長寿・子育て・障害者基金による助成事業のうち、高齢者や障害者の在宅福祉、子育ておよび障害者スポーツ振興などの参考となるものをご紹介します。

障害者の情報リテラシー支援事業

社会福祉法人豊田市福祉事業団（愛知県豊田市）

社会福祉法人豊田市福祉事業団では、「ご本人への分かりやすい伝達手段と真の気持ちを引き出す工夫」という視点から障がいのある方の地域生活支援を考える国際シンポジウムを開催し、カリフォルニア州で実践されている本人中心の取り組みを紹介しました。



社会福祉法人豊田市福祉事業団
障がい者就労・生活支援センター 室長
天野 雄二さん

ライフサイクルに応じた さまざまな支援を実践

社会福祉法人豊田市福祉事業団は、平成6年4月に設立され、障がいのある方の乳幼児期から成人期までのそれぞれのライフサイクルに応じたさまざまな支援を行うため、障がい者の福祉・医療に特化した専門職集団を組織し、豊田市と一体となつて安心して生涯を過ごせるノーマライゼーション社会の実現に向けた取り組みを実践しています。

18歳未満の障がいのある子どもを対象にした「豊田市こども発達センター」では、医療・相談・保育など総合的な療育を通して、家族と手を携え、子どもが健やかな成長・発達を目指しています。「豊田市障がい者総合支援センター」では、18歳以上の障

がいのある方の自立・社会参加を支援し、障がい者の豊かな地域生活を図るため、障害者自立支援法に規定する「障害福祉サービス事業」や豊田市から委託された「就労・生活支援事業」などを行っています。「豊田市福祉事業団では、常に「当事者中心」を心がけながら細やかな支援を実施しています」と室長の天野雄二さんは話します。

カリフォルニア州で行われる 個別支援計画に学ぶ

平成18年度には、独立行政法人福祉医療機構（WAM）の高齢者・障害者福祉基金「地方分」の助成を受けて、「障害者の情報リテラシー支援事業」を行いました。

「個別支援計画を策定するうえで一番大事なのは、障がいのある方のニーズをきちんとひろうこと、その人の思いを感じ取ることで、知的障がい者の場合、判断することが難しかったり経験が限られていたりするために、周りの人の意見に流されがちで、発言すべてが本望なのか判断が難しいところがあります。また、話の内容が理解できていない場合もあり、情報リテラシー（情報を使いこなす能力）の問題を感じます。そんなときに『カリフォルニア州では、きちんと計画の内容も理解して、本人のニーズも引き出して合意したうえで、その人の夢を実現するための個別支援計画をたてる実践を、州をあげて組織的にやっている』というのを文献で読みました。どういう支援をしているのか聞いて、日本で取り入れる部分があれば取り入れていきたいという思いから、カリフォルニア

DATA

社会福祉法人豊田市福祉事業団
障がい者就労・生活支援センター

〒471-0066

愛知県豊田市栄町1-7-1

TEL. 0565-36-2120

FAX. 0565-36-0567

<http://www.fukushijigyodan.toyota.aichi.jp/sougosien/top.html>

チャレンジ レポート

このコーナーは、長寿・子育て・障害者基金による助成事業のうち、高齢者や障害者の在宅福祉、子育ておよび障害者スポーツ振興などの参考となるものをご紹介します。

離島におけるADL体操指導者養成事業

特定非営利活動法人ヘルスプロモーションかごしま（鹿児島県鹿児島市）

特定非営利活動法人ヘルスプロモーションかごしまは、子どもから高齢者までの地域住民が心身ともに健康に過ごせるよう、体操指導を通して支援しています。活動の中心になっているのは「ADL対応型高齢者体操」の普及と地域リーダーの養成です。



特定非営利活動法人ヘルスプロモーションかごしま 理事長 長井 英子さん

DATA

特定非営利活動法人ヘルスプロモーションかごしま
(ADL対応型高齢者体操研究会鹿児島県支部)
〒890-0034
鹿児島県鹿児島市田上4-7-24
TEL&FAX. 099-206-3560

一貫して地域住民の心と身体の健康づくりを支援

特定非営利活動法人ヘルスプロモーションかごしまの前身は、高校の保健体育教師であった長井英子さんと体育教師仲間による「体操研究会」で、平成元年1月に産声を上げました。平成16年7月に特定非営利活動法人として認証されましたが、子どもから高齢者までの地域住民が心も身体も健康な日々を過ごせるよう、体操指導を通しての支援を一貫して行っています。

なかでも力を入れているのは「ADL（日常生活動作）対応型高齢者体操」の普及と地域リーダー養成です。「ADL対応型高齢者体操」とは、体操発祥の地であるスウェーデンにおいて、住民の努力で

芽生えた、年金受給者の体操活動がベースとなっており、成蹊大学の久保洋子教授が中心となって、日本人向けに研究されたものです。

ヘルスプロモーションかごしまでは、大久保教授が中心となって編みだした基本的な「ADL対応型高齢者体操」を普及させる活動を行っています。

日常生活が営める身体を維持できるだけの筋力・柔軟性・調整力を持ち続け、健康年齢を延ばすのが狙い。



ソフティーボールを使ったADLアップ体操

いです。それに加え、元体育教師としての研究や経験の蓄積や、創作ダンスなどのノウハウを活かし、オリジナルの「ADLアップ体操」も多数開発しています。比較的元気な高齢者向けには、筋力トレーニングの要素や柔軟性をつける要素を盛り込んだり、肺の機能を向上させるために歌いながら体操するなど、豊富なバリエーションがあります。

離島での指導者養成は助成のおかげで大成功に

平成18年度には、独立行政法人福祉医療機構（WAM）の高齢者・障害者福祉基金「地方分」の助成を受けて、「離島におけるADL体操指導者養成事業」を行いました。



「ADL対応型高齢者体操の理論」を学ぶ受講生

奄美大島・種子島・徳之島の3か所での「地域リーダー養成セミナー」は、基礎・応用編を2日間、実践編を2日間の計4日間ずつ、理論の講義とADL体

操の実技を織り交ぜて実施され、盛況のうちに終わりました。奄美大島と徳之島には支部ができ、活発な活動が繰り広げられています。「このセミナーで、多くの地域リーダーを養成することができ、指導者の資質向上につながりました。また、マスコミの協力もあって、ADLなどの理解と体操の有効性を地域の方々に紹介することができました」と、長井さんは力強く話します。

平成19年度以降も地域リーダー養成セミナーを開催し、6月には第14回を実施しました。セミナー修了生には、ヘルスプロモーションかごしまから「地域リーダー」の資格を付与しています。

「私たちが自信を持って資格を出せるようになったのも、助成によって活動の基盤がしっかりしたおかげです」と長井さんは感謝の気持ちを述べます。

マスコミで取り上げられたこともあってか、県外の方の受講も増えており、ますます広がりを見せています。

また、ジュニア向けのチャアリーディング教室を開催するなど、ヘルスプロモーションかごしまの活動の幅もどんどん広がっています。

人前で実力を発揮して指導でき、人間性も豊かなスタッフは、そう簡単には増えていかないため、いつでも人手不足で大忙しの毎日なのですが、今後も着実に発展していくものと思われれます。

「同じ鹿児島県と云っても、鹿児島市から奄美大島までは東京から大阪と同じくらいの距離があり、交通費も高額です。助成をいただかなければとてもできない事業でした。本当に感謝しています」と、理事長の長井さんは振り返ります。

当日の指導者養成講座を成功させるには、事務局が事前の打ち合わせ等に出かけなければならず、そこは自己資金で頑張ったのだそうです。

「それまでは、鹿児島市内で何度か指導者養成セミナーを行っており、奄美大島や徳之島から受講してくれた人もいました。また、体育教師時代に奄美大島に5年間赴任した経験があり、奄美高校には看護科もあるのを知っていたので、こういった生徒たちも体操に対する理解を深めて指導の幅を広げてもらいたいという思いもあって、ぜひ離島でもセミナーを開きたいという気持ちが強くなりました」と長井さんは熱く話します。

活動の幅はさらに広がって

特定非営利活動法人ヘルスプロモーションかごしまによる「離島におけるADL体操指導者養成事業」は、平成18年度に高齢者・障害者福祉基金の「地方分」助成事業テーマ④「民間非営利団体等による地域の福祉・介護活動に関する事業」として、助成を行ったものです。

独立行政法人福祉医療機構評価

本団体は、20年近くにわたって幅広い層の健康・体力づくりのための運動の普及啓発に携わってきました。代表者は元体育教員であり、専門家からの指導も仰ぎつつ、北欧における高齢者体操なども非常に熱心に研究し、理論的なバックボーンも固めています。

近年、単に健康体操の視点からの専門性だけでなく、高齢者や障害者などの持つ心身の特性などを考慮に入れたADL体操の普及、指導者の養成に力を入れていたところ、県下の離島からの研修開催の要請が強くなり、今回の事業計画に至りました。各地元の社会福祉協議会などと連携を図りつつ、福祉・医療関係者の参加を得て指導者の養成を実施したところ、非常に好評を博しました。移動などの経費を考えると、本助成がなければ実現できなかったと言えます。また、この事業をきっかけに奄美、徳之島などには支部ができ、活動が広がり、継続しつつあります。未実施の他の島（喜界島、与論島など）からも実施要請が来るようになりました。

これらの成果に弾みをつけ、19年度以降も県下各地において、研修会等を継続的に実施しています。

チャレンジ レポート

このコーナーは、長寿・子育て・障害者基金による助成事業のうち、高齢者や障害者の在宅福祉、子育ておよび障害者スポーツ振興などの参考となるものをご紹介します。

芹川プレーパークのびのび事業

特定非営利活動法人芹川（滋賀県彦根市）

特定非営利活動法人芹川は、地縁団体である自治会と協働し、互いのよいところを遺憾なく発揮して、地元を流れる芹川の清掃活動を行ったり、子どもの遊び場「いちごプレーパーク」や「晒庵」^{（さしあな）}を開設するなど、地道な「まちづくり」活動を展開しています。



特定非営利活動法人
芹川
理事長
辻橋 正一さん

DATA

特定非営利活動法人芹川

〒522-0051
滋賀県彦根市中藪町722-1
TEL. 0749-26-2130
FAX. 0749-26-2150
<http://nposerigawa.com/>

自治体と協働で行う 「芹川の清掃活動」

滋賀県彦根市の市街地の南側を流れ、琵琶湖に続く芹川のほとりには四季折々の花が咲き、散歩する住民の心をなごませてくれます。

その芹川の清掃活動は、自治会が個々に行っていました。ところが、高齢化の波によって継続が厳しくなってきたうえに、平成8年には清掃中に大きな事故もあつたそうです。「清掃するのをやめようか」という話も出たのですが、「美しい芹川を後世に伝えよう」ということで話がまとまり、任意団体「芹川を美しくする会」を平成12年に立ちあげ、ボランティアを募って継続することにしました。

法人格をもったほうが社会的に認められるだろう



芹川の清掃は、高校生ボランティアが大活躍

ということと、資金づくりや助成金申請もやりやすくだろうということ、平成17年2月に特定非営利活動法人芹川として認証してもらいました。

平成12年の任意団体立ち上げ時から、年に1回、JR彦根駅から琵琶湖までの芹川に隣接する11自治体と協働して、一斉に芹川を掃除してきました。近くにある2校の高校生150名ぐらいいもボランティアとして参加してもらい、総勢1,200

名が集う大きな行事となっています。

「これだけ大規模な清掃ができるのは、自治会さんの力に負うところが大きいです。地縁団体である自治会と市民活動団体であるNPOが一緒になって活動すると大きな力になると実感します。地縁団体は最小限の仕事を継続的に行うことが得意なのに対し、NPOは企画をたてるのは得意でも後が続かない面があるため、協働するとお互いのいい面を發揮できるのです」と、理事長の辻橋正一さんは力強く話します。

子どもたちの遊び場 「プレーパーク」をつくる

平成18年度には、独立行政法人福祉医療機構



プレーパークで開かれた工作教室も大盛況

もたちが遊ぶ姿が見られ、近所の乳児保育所の子どもたちも活用しています。ここでは月に1回、小学校の低学年を対象に工作教室を実施してい

(WAM)の子育て支援基金「地方分」の助成を受けて、「芹川プレーパークのびのび事業」を行いました。

助成事業を行うきっかけについて、辻橋さんは次のように話します。「いくら定期的に清掃しているといっても、雑草が生い茂っていて危ないし、犬や猫の糞尿もあって非衛生的なために、子どもたちが遊ぶ光景をあまり芹川に寄りつかない。子どもたちが遊ぶ光景をあまり見たことがない、という状況になっていました。そこで、幼児が川の近くで遊べる場所を作ったほうがよいだろう。犬や猫が入って糞をしないよう塀で囲んだらどうか、ということ、助成をいただいでプレーパークを作ろうということになりました」

最初から大きいことは考えず、自分らで手作りできるところということで考えていったのだそうです。いちごプレーパークと呼ばれる公園では、土日を中心に子ども

ます。辻橋さんは、「ここは本当に自治体とNPOがひとつになってやっているんです。地縁団体のよいところとNPOのよいところをとってやっているという感じですね。市有地を、昔から信用力がある自治会が借りて、企画の得意なNPOが事業を行います。事業には自治会の人たちが協力してくれる、という感じで進めています」と話します。

子どもたちとの関わりを深める取組み

「この界限は高齢化が進んで若者や子どもが減っているうえ、子どもの遊ぶスタイルが変わってきたり、習い事などで子どもたちが忙しかったために、計画してもなかなか集まってももらえないのが悩みの種です」と、辻橋さんは子どもたちとの関わり方の難しさを説明してくれました。

そんな中、市の既存の建物を改築して「**晒庵**」という会館を作り、近所の方々に鍵の管理をお願いし、開いているときは、いつでも誰でも使えるオープン利用としたところ、子どもたちの屋内の遊び場として、芹川を散策する方の休憩所として定着し、活用しています。

また、昔から滋賀に伝わる「湖東焼き」という陶芸の窯も作り、湖東焼きを育てる会に協力してもらって、年に2〜3回は陶芸教室を開催しています。毎回50名ぐらいの子どもが集まります。

自治会とNPOの協働によるまちづくりは、今後も着実に花を咲かせ実を結ぶことでしょう。

特定非営利活動法人芹川による「芹川プレーパークのびのび事業」は、平成18年度に子育て支援基金の「地方分」助成事業テーマ①「地域や家庭における子育て支援事業に関すること」の事業として、助成を行ったものです。

独立行政法人福祉医療機構評価

彦根市の琵琶湖に注ぐ「芹川」の清掃事業は、地元の多くの自治会が行う活動でしたが、一時期中断していました。その後7つの自治会により、住民有志による清掃事業が再開しました。月1回の清掃事業と共に、地域の子どもを巻き込む様々な活動を通じ、地域住民の繋がりを基盤として誕生したのがこの法人です。

今回の事業は、この川沿いの細長い市有地の一部を借り受け、公園用地を整備し、「プレーパーク」を設置しようとしたものです。整地に業者を利用するほかは、フェンス・柵の材料の調達・柵の設置等、地元自治会やボランティアにより行われ、設置工事自体が住民参加の事業となりました。

NPO事務局は、地元の同世代の仲間と様々な繋がりを持つ方で、豊かなアイデアに基づく様々な活動を通じた繋がりの1つがこのNPOです。

その後も、芹川を散策する人の休憩の場として、プレーパークに隣接して「**晒庵**」の建設(市の既存の建物の改修)、「**リンゴ園**」等を設置しています。これらの活動を「自治会と市民活動団体の協働」と整理されていますが、自分が生まれ育ったまちの自然・伝統を残そうという住民全体の「まちづくり」活動の一環であるといえると思います。